様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ３０ 年　 ６ 月 ２８ 日現在

機関番号：３４４１６
研究種目：基盤研究(B)（一般）
研究期間：2014～2017
課題番号：２６２８４１３４

研究課題名（和文）黒潮の道－その地域学的比較研究

研究課題名（英文）The Kuroshio (Japan Current) sea lane and its hinterland: a comparative regional study

研究代表者
野間　晴雄（NOMA, HARUO）

関西大学・文学部・教授

研究者番号：００１３１６０７

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　12,000,000円

研究成果の概要（和文）：　黒潮の影響をもつ日本の太平洋沿岸地域（南九州，土佐，紀州，駿豆，房総の5地域）での，地域の相互交流，技術移植，文化伝播，文化融合を考究した。その主たる方法は「歴史生態システム」の追求で，次の６点に注目する。１）自然生態，２）集落，３）漁法・造船技術，４）陸域と海域の生業/産業とその交流，５）食文化・食品加工とその流通，６）５地域の比較地域類型学的考察。
「黒潮の道」の比較地域学は，時間と空間の双方に目配りする視点と，東向きか西向きかといった文化・技術・人の移動の方向性を識別すること，市場や消費などの歴史的変化を取り込むことが重要である。

研究成果の概要（英文）：This joint-research is based on historical- cultural- geography. The basic principle at issue are intercommunication, technology transplant, culture diffusion, cultural fusing along the Pacific coast in Japan: five study areas are selected: Southern Kyushu, Tosa (Kochi prefecture), Kishu (Wakayama and Mie prefecture), Izu islands and peninsula, Boso peninsula (Chiba prefecture).
The main analytical approach employed is historical ecology of Kuroshio sea lane and its hinterland. We targeted the six subjects: 1) physical environment and natural ecology, 2) settlement, village and colony, 3) fishing method, ship building and navigation, 4) land and sea subsistence or industry and its intercommunication, 5) gastronomic culture and food processing, 6) comparative regional typology of the above five areas. Our 'Kuroshio Sea Lane'study aims not only time-space dimension but also cultural and technological vectors, people movement, consumption and market area in its historical context.

研究分野：人文地理学

キーワード：黒潮　ネットワーク　紀伊半島　房総半島　市場　移民　食文化　農漁業

１．研究開始当初の背景

海や水域から沿岸域の歴史を見る発想は，F.ブローデルの『地中海』の大著以来，A.リードの東南アジア海域，網野善彦，村井章介・荒野泰典など日本史家の内海や東アジア海域を焦点にあてた社会史，東アジア史研究者による東シナ海や南海をめぐる交流史など，ここ四半世紀にわたる大きな世界的な潮流である。ボーダレス化した世界をみる視点として，その重要性は衰えるどころか，ますます同時代論としても輝きを増してきている。

われわれも過去２つの大きな海に関わる歴史・文化・民俗に重点を置いた共同研究を行ってきた。「南海地域における琉球の歴史地理的実体と意味の総合的研究」（平成 17～19 年度科学研究費基盤研究（B）：代表・高橋誠一）では，海域国家「琉球」を主体として，従来の中心と周辺を逆転させて，これまでの日本や中国中心史観の打破を歴史地理学サイドから試みた。その延長上で東アジア海地中海というべき地域を対象に，「環東シナ海・環日本海沿岸域の文化交渉と歴史生態をめぐる学術的研究」（平成 22～25 年度科学研究費基盤研究（A）：代表・野間晴雄）を行った。①天草，壱岐・対馬の東シナ海域，②日本海域と北海道，③山東半島・遼東半島の渤海域，④広義の琉球とベトナム，⑤全羅道・済州島を中心とした朝鮮の５つの部分地域を対象として，文化交渉の歴史的実体を，もの，家屋，集落や水運，在来産業・食文化などから，地理学，民俗学，建築学，歴史学の学際的，国際的研究者構成で明らかにしてきた。

今回の共同研究はこの視点を継承しつつ，対象域をこれまで扱わなかった黒潮の道，つまり日本の太平洋沿岸，地質的には外帯に属する地域に焦点をあてて，実証的に文化の交渉を地理学の手法を用いて明らかにしていく。黒潮のルーツである南西諸島や台湾などは今回のメインの尾対象地域ではない。今回の共同研究で，ほぼ日本をとりまく海にかかわる文化交渉の総合共同研究を完結させ総括する意図をもつ。

ただし，今回は成果の地元への社会的還元と，地域で研究を地道にすすめてきた歴史・地理・民俗の研究者との情報交換，共同研究をめざした。さらに将来的には，研究で得られた知見を，学校教育現場でどう子供たちに伝え，それを保持・継承していくかの枠組み作りを今後の課題としたい。

２．研究の目的

黒潮はフィリピン東部から台湾，トカラ海峡を横切り，南九州，四国，紀伊半島，東海地方から伊豆諸島，房総半島で東に転じる，幅 50～100km、最大時速は 7 ノットの激流である。この黒潮の道のうち，九州～関東にかけての太平洋沿岸地域を対象に，地域の相互交流，技術移植，文化伝播，文化融合などを広義の文化交渉としてとらえ，それが表象された「かたち」である家屋，集落，土地システム，技術・信仰・儀礼慣習などを，総合的かつ複眼的に分析する。

その主たる方法は，「歴史生態システム」の追求である。地域の相互交流，技術移植，文化伝播，文化融合などの事例を比較地域学としてまとめる枠組を模索した。研究メンバーが紀州と房総相互を何度も訪問・調査するなかで，「共通知」を見いだすことにも留意した。

３．研究の方法

具体的には，①鹿児島・宮崎を中心とした南九州，②高知県，③紀伊半島，④駿河湾・伊豆半島，八丈島，⑤房総半島の 5 つの地域を対象に，１）自然生態，２）集落，３）漁法・造船技術，４）陸域と海域の生業と交流，５）食文化・食品加工，６）上記の５地域の地域類型学的考察からアプローチし，地域の歴史文化地理学的事象の分析と総合する。その知見から新たな地域像を描出し 5 つの地域誌作成をもとにした「黒潮の道」歴史生態論へ昇華させる。それを地域資源として地元に還元する。

4 年間で 9 回の研究集会を開催した。基本は現地での地元研究者との交流や共同調査，現地討論を組み合わせて実施した。そのうち 1 回は日本地理学会のシンポジウム（2017 年 3 月，筑波大学）で全体の枠組みを確認した。

（1）9 回の研究集会の内容

①第 1 回　2014 年 11 月 22 日～24 日，公立学校共済　サンかつうら（和歌山県勝浦町），研究発表と現地討論（紀伊田辺，串本，勝浦，新宮）

橋本征治（関西大学名誉教授）「黒潮の道―文化伝播の視点から―」

桑原康宏「熊野の景観とその変遷―絵図・道中記・地名をもとに―」

上野一夫（熊野歴史研究会）「紀州藩遠見番所と狼煙場」

水田義一「熊野古道―大辺路（海岸の道）と中辺路（内陸の道）の変容―」

櫻井敬人（太地町くじら博物館・学芸員）「太地・黒潮を越えて―捕鯨、海外出稼ぎ、そして「くじらの博物館」」

②第 2 回　2015 年 4 月 25 日～26 日，大新旅館（銚子市）（テーマ：房総・伊豆・紀伊の黒潮の道），研究発表と現地討論（銚子）

野間晴雄「黒潮の道としての紀伊・土佐・伊豆・房総」

安藤 清（千葉県立銚子高）「現在の銚子―ジオパークの推進―」

山下琢巳（城西大）「銚子市街形成史―複合都市の産業変化―」

三木一彦（文教大）「外川・銚子における紀州移民の動向」

齋藤鮎子「焼津の水産・加工業についての予察」

石坂澄子「寒天の流通形態－伊豆のテングサ漁を中心として－」
③第 3 回　2015 年 6 月 15 日　宮崎大学教育学部（テーマ：房総・四国・南九州の黒潮の道）
中村周作（宮崎大）「伝統的魚介食からみた黒潮文化圏と他地域との比較研究—農文協『日本の食事シリーズ』の分析より—」
関 信夫「千葉県にみる黒潮文化の様相」
野間晴雄・松井幸一・齋藤鮎子「高知県土佐市域における「黒潮の道」の調査への予察と展望」
④第 4 回　2015 年 9 月 3 日～9 月 6 日
和歌山県有田郡湯浅町・広川町周辺での地域調査と現地討議，一二三旅館（湯浅町）
⑤第 5 回　2016 年 3 月 23 日，関西大学東京センター（東京）（テーマ：いろいろな黒潮の道）
中村周作「黒潮文化圏における伝統魚食に関する序論的研究」
西岡尚也「ジョン万次郎の漂流と世界地図－地理教育の視点から－」
松井幸一「土佐市の黒潮関連総合調査について」
小口千明「黒潮文化と瀬戸内の暮らし」
野間晴雄「紀州・湯浅と広村における後背地と進出地—黒潮の道に関連して—」
石坂澄子「寒天及びテングサの輸出入の変遷に関する考察」
矢嶋巌「黒潮沿岸域における薪炭生産について」
中西僚太郎「南海の理想郷建設—大正・昭和期の南房総を事例に—」
⑥第 6 回　2017 年 8 月 23 日～26 日，
旅館松の家（勝浦市），研究発表と現地討論，調査（勝浦）
江澤修（勝浦市民宿組合組合長，市観光協会副会長）「勝浦の歴史と民俗」
舟越寿尚「大都市部における博物館の新たな役割－大森海苔のふるさと館の活動を例に－」
矢嶋 巌「企業の森の取り組みが有する意義」
大野幹雄（郷土史家・書画家）「勝浦付近の海難事故の歴史」
⑦第 7 回　2017 年 3 月 29 日，筑波大学，シンポジウム：黒潮の道—地域学的比較研究をめざして—
オーガナイザー：野間晴雄，小口千明，中村周作，司会：中西僚太郎，中村周作，松井幸一，コメント：三木一彦，矢嶋巌，関信夫，山下琢巳　＊話題提供は［学会発表］参照
⑧第 8 回　2017 年 8 月 23 日～8 月 27 日，
椿荘（八丈町），現地調査と現地討議
⑨第 9 回　2018 年 2 月 10 日～11 日，きしだ荘（和歌山市加太），現地討議と最終報告書へ向けたディスカッション
藤井保夫（元和歌山県県文化遺産課長）「加太・友が島について」

（2）和歌山県湯浅町・広川町，千葉県勝浦市・銚子市，東京都八丈町での共同調査
メンバーが同じ調査地で，同時期に個別調査を実施しながら，その知見の共有と現地討議を深めて，いくつかの共通認識が醸成された。その主なものは，以下の 4 点である。
1）集落形態における農民的要素，漁民的要素とその立地・配置，および紀州から房総への移植と変質，およびその現代的変容，2）紀州からの漁業・捕鯨などの出漁や移民は関東方面のみならず，西海方面あるいは海外へも拡散へも注目が必要である，3）人・文化・技術の移動には移動先でのプル要因として市場の存在が重要である。とりわけ房総というフロンティアには消費地，イノベーションの革新，卸売ネットワークの中心としての江戸/東京の役割が決定的に重要である（例：紀州湯浅の醤油の関東への進出），4）八丈島は黒潮本流を越えた南に位置し，その隔絶性は近世のみならず明治期においても高かったし，伊豆諸島のなかでも特異な位置にある。魚の保存加工技術や薪炭，酪農品加工，熱帯植物などに特異な発展シナリオが指摘できる。

４．研究成果

主要な研究成果は以下の通りである。
①紀伊半島南端の国境は古代・中世と変遷を重ね，近代にも不自然な県境の画定を行っている。古代の紀伊国と志摩国の国境は確定していない。熊野地方は近世の紀伊国牟婁郡だが，この地の北半分は古代には志摩国に属していた。14 世紀伊勢国司北畠氏の支配で伊勢国度会郡に編入された。伊勢国と紀伊国との国境は，16 世紀末に新宮を拠点とする戦国大名堀内氏の版図が紀伊国で，現在の紀伊長島町の荷坂峠が国境として確定する。熊野という名は，熊野信仰とともに全国に多くの熊野神社が広まり，また紀州の漁法が関東や九州に広まる。紀州は黒潮の流れを利用した文化の発祥地の一つであるが，行政的には中央から僻遠の地であった。陸上の支配者からみた僻遠の地が，海洋文化や経済の面からみると，新しい文化・技術の発祥地となる。
②テングサは日本各地の暖海の磯でとれるが，黒潮の影響下にある太平洋岸は量が多く波が荒いため良質である。西伊豆，伊豆諸島，志摩半島，和歌山，徳島，愛媛などで現在でも採藻する。古くからの貢納品ではあったが，江戸時代に煮汁を寒中で乾燥凍結を繰り返して水分を抜き寒天とする技術が京都で開発された。江戸時代に食材としての中国への輸出品となり，近代以降は欧米への医療培養用として輸出される。戦後は原藻・寒天の輸入が開始され，現在では輸出入量が逆転してしまった。寒天生産地も戦前にはテングサの買い付け・輸出業者が集まる大阪に近い北摂の山間地が中心であったが，現在では岐阜や長野県（伊那谷）に集中している。
③南房総では，近世期に紀州などからの関

西漁民の出漁により漁業（主にイワシ漁）が盛んになる。その過程で，半農半漁的な沿岸集落（藩政村レベルの村）の中に，漁業に特化した地域集団が生成した。農業を主とする地域集団（岡）と漁業を主とする地域集団（浜）との間で利害関係の対立が生じるとともに，「浜」の「岡」からの分村が行われる場合もあった。勝浦市の浜波太，浜行川や，分村はしなくとも，近世期に集落内が「岡」と「浜」に分かれていた事例が，南房総では内房地域に多い。高知県の幡多郡も紀州漁民の出漁（カツオ漁）により，貝ノ川や下川口のように，１つの大字のなかに，農業集落である「郷」と，商業機能や港の機能も兼ね備えた漁業集落である「浦」の両方の集落を内包する事例がある。

④土佐清水出身のジョン万次郎（中浜万次郎）は幕末明治期に日米双方で活躍した外交家であるが，その基底には黒潮沿岸域での捕鯨文化という共通性がある。鳥島から万次郎らを救出したのは米国の捕鯨船であり，船長の勧めで合衆国本土に渡り捕鯨の知識と航海術を学ぶ。彼に日本帰国を決意させたのも，日本近海での捕鯨船を支援したいという志であった。米国から持ち帰った世界地図は土佐の若者に世界を認識させる契機ともなった。

⑤黒潮文化圏における伝統的魚介類食について，漁獲統計で地域差を検討し，さらに農文協より刊行された『日本の食生活全集全 50 巻』）で昭和初期頃の魚介類食の特徴をみると，次の点が指摘できる。海産魚介流通が十分でなかった昭和戦前期では，内陸部のみならず沿岸部でも淡水魚介消費が意外なほど多いこと，黒潮に乗って西へ東へと移動し各地に定着した紀州漁民が伝えた料理の多い。これらは特色あるローカルフードとして現在もかたちを変えて生きており，水産物の六次産業化にも貢献している。

⑥紀州（＝紀伊半島）と房総（＝房総半島）は黒潮が陸域に最近接する２つの陸域である。まとまった耕地に乏しい紀伊半島沿岸域では，直接的な後背地との結びつきは少ないが，人々は黒潮を利用して太平洋の外海や房総・西海方面へ繰り出していき，彼地で新たに進化した技術や食文化，流通システムを創出していった。

両地域の近世から近代にかけて紀州と房総への地域間交流，技術・文化の移植と変容は，1）漁場開拓，2）醤油醸造業，3）みかん，4）杉林業と杉材移出を指標に比較考察すると以下のことが判明した。紀州側の核心域として有田郡湯浅・広村地域は，泉州から連なる先進的・商業的・大規模な地引網・八手網や高度な技術を持つ釣漁の遺伝子を継承し，未開拓漁場の房総（外房）へ進出する。同じ醸造業でも家業的な味噌に比べて醤油は商業的性格が強く，利根川水運を通じて大消費地江戸と結ぶ肯綮の地である銚子に移植された。関東では気候的に栽培が困難であったみかんを紀州から移出したエネルギーは，有田川流域の在来みかんを大量に回漕する輸送力・情報ネットワークと，摂津国池田の植木の台木技術応用の賜物である。重量材の杉材も海運と資金力，市場の読みがなくては，江戸で商品とはなり得なかった。成功の背景に上方で培った高い技術力と商業性に負うところが大きい。紀中の湯浅・広村地域と房総地域は，上方と江戸を，黒潮を介して結びつける技術の「孵化器」として位置づけられる。

⑦在来みかん（小みかん）は中国起源の温州みかんが東シナ海・肥後八代経由で導入されるまでは，わが国の太平洋沿岸の暖地で散在的に栽培されていた。それぞれの地にはそのルーツや改良家，品種，栽培発祥地などの民俗的記録が残るとともに，瀬戸内海沿岸や島嶼部，紀州の沿岸部には残存種が見られる場合がある。基本農政による西南日本の傾斜地は多くがみかんの主産地形成が図られたが，その産地が果樹の多様化によって消費量が減り，現在は，他の中晩柑類やレモンなどに転換したり，キュウイなどに改植されたりしている。何よりも生産者の高齢化によって廃園や放置が増えて大きな曲がり角に来ている。

⑧技術革新を黒潮文化論に取り込むためには，黒潮地域の産業の記述を重視することが重要である。かつて日本で一世を風靡した照葉樹林文化論は，各文化要素の起源とその分布と広がりが重要視されるが，産業化過程やその変容には関心が疎く，視線は過去・起源を指向してた。われわれの「黒潮の道」の共同研究では，魚の回遊や人の移動，モノの移動の関係性をより分節化して分析する。集落という場を重視して，その起源や変容，後背地との関係にも留意することで，新たな展開の可能性を見出した。移動先の浜に住み着くことの意義を踏まえて，集落という場の研究から出発して，より多層的にスケールを拡大していく分析手法は重要である。

さらに紀州と房総の比較にはこのような商業化，市場化過程を組み込むことで，素朴な文化技術伝播論が，よりいっそう現実味を帯びた歴史実体になることが共通理解となった。「黒潮の道」の比較地域学は，時間と空間の双方に目配りする視点と，東向きか西向きかという文化・技術・人の移動のベクトルを識別すること，市場や消費などの歴史的変化を取り込むことで，より実り豊かなものになろう。

書籍体としての最終報告は，地誌的な要素を盛り込みつつ，『黒潮の道―地域学的比較研究』として，次年度をめざして刊行したい。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕（計 46 件）

①<u>野間晴雄</u>　黒潮の道―地域学的比較研究

をめざして，E-JournalGEO，査読有，Vol。12，No.1 164-167，2017
10.4157/e.jeo.12.164
②野間晴雄　小西和の瀬戸内海論のまなざし　関西大學文學論集，査読無，第 67 巻 3 号，2017，157-178 頁
③中村周作　佐賀県における水産業の展開―その実態とその生産拠点である漁港の展開，および'有明七珍'の勧め―，宮崎大学教育学部紀要（社会科学），査読無，第 90 号，2017，pp.45-62
④豊田紘子，小口千明,伊藤大生,山下史雅,鈴木修斗,佐藤壮太,川添航，鈴木秀弥,野場隆汰　明治期日本における温州蜜柑の普及と在来小蜜柑からの嗜好変化，歴史地理学野外研究，査読無，第 18 号，2017，pp.21-84
⑤西岡尚也　宇宙からの地球認識をどう教えるのか―宇宙時代の地理教育における地球認識の考察―，沖縄地理，査読有，第 16 号，2017，　pp.90-106，
http://okinawa-repo.lib.u-ryukyu.ac.jp/bitstream/20.500.12001/21619/1/No16p099.pdf
⑥矢嶋 巌　日本における森林保全活動に関する研究―企業の森の取り組みの背景としての森林利用の歴史と CSR，神戸学院大学人文学部紀要，査読無，第 37 号，2017，pp.27-36
⑦杉山純平・額田雅裕　和歌山市立博物館所蔵「和歌山市地籍図」にみる近代初期の和歌山，和歌山市立博物館研究紀要，査読無，第 32 号，2017，pp.51-57
⑧中村周作　佐賀県における伝統的魚介類食の地域差，人文地理，査読有，第 69 巻 4 号，2017，pp.485-499
⑨水田義一　熊野国の地名について―消えた国名―，紀伊風土記の丘研究，査読無，第 4 号，pp.42-47 頁
⑩松井幸一　今泊集落の景観的特徴と街路構成，今帰仁グスクを学ぶ会 10 周年記念誌，査読無，2015，pp.50-59
⑪野間晴雄　モノと文化の交流からみた東アジア沿海　地理（古今書院），査読無，第 60 巻 10 号　2015 年，pp.16-23

〔学会発表〕（計 53 件）
①野間晴雄　黒潮の道―その比較地域学―，第 42 回 MIT 研究会，2017 年
②水田義一　紀伊半島南端の国境変遷と画定―熊野・紀伊・志摩・伊勢国―，日本地理学会春季学術大会，シンポジウム「黒潮の道―その地域学的比較研究をめざして―」，2017，筑波大学
③石坂澄子　輸出入品としての寒天　―貿易量の推移を中心として―，日本地理学会春季学術大会，シンポジウム「黒潮の道―その地域学的比較研究をめざして―」，2017，筑波大学
④中西僚太郎　黒潮流域における沿岸集落の地域学的比較研究―南房総と土佐の岡（郷）・浜（浦）集落に注目して―，日本地理学会春季学術大会，シンポジウム「黒潮の道―その地域学的比較研究をめざして―」，2017，筑波大学
⑤中村周作　黒潮文化圏における伝統的魚介類食の地域的展開－千葉県，高知県他を事例として－，日本地理学会春季学術大会，シンポジウム「黒潮の道－その地域学的比較研究をめざして－」，2017，筑波大学
⑥西岡尚也　ジョン万次郎の漂流と世界地図　－黒潮と捕鯨船が結んだ世界－，日本地理学会春季学術大会，シンポジウム「黒潮の道－その地域学的比較研究をめざして－」，2017，筑波大学
⑦野間晴雄　紀州と房総の比較地域学－開拓・技術・移動の系譜と市場－，日本地理学会春季学術大会，シンポジウム「黒潮の道－その地域学的比較研究をめざして－」，2017，筑波大学
⑧中村周作　宮崎県の伝統的飲食文化－だれやみ（酒と肴）文化考－，人文地理学会特別例会，2015 年 6 月，宮崎大学
⑨野間晴雄　近世における島嶼農耕空間と農法の含意－瀬戸内海の島嶼を中心に－人文地理学会第 137 回歴史地理研究部会，2014 年 11 月，広島大学東広島キャンパス

〔図書〕（計 18 件）
①木庭元晴　飛鳥藤原京の山河意匠－地形幾何学の視点－，関西大学出版部，2018，248 頁
②関西大学地理学・地域環境学編（野間晴雄），関西大学地理学・地域環境学教室，広島県尾道市の地理（地理学実習調査報告 42）2017 年度，2018，236 頁
③額田雅裕　絵図で読む荘園の立地と環境，古今書院，2017，241 頁
④千葉地理学会編（関 信夫）　地理から学ぼうちばの魅力　おもしろ半島ちば，千葉日報社，2017，263 頁
⑤中西僚太郎編　歴史地理学実習報告第 16 集（高知県土佐清水市），2017，102 頁
⑥関西大学地理学・地域環境学教室編（野間晴雄，松井幸一，齋藤鮎子），関西大学地理学・地域環境学教室，鹿児島県南さつま市の地理（地理学実習調査報告 41）　2016 年度 2017，236 頁
⑦新谷英治編著（野間晴雄・松井幸一・齋藤鮎子）　祈りの場の諸相，関西大学東西学術研究所，2017，齋藤鮎子「山宮御神幸道の復元に関する試論－富士山本宮浅間大社と山宮浅間大社を結ぶ道－」21-45 頁，松井幸一「琉球における湧水分布祭祀空間」151-174 頁
⑧伊藤純郎・山澤学編著（中西僚太郎）筑波大学出版会，破壊と再生の歴史・人類学，2016，「景勝地の風景美の変容：近代の松島を事例として」49-72 頁
⑨筑波大学人文社会科学研究科歴，史地理学研究室（中西僚太郎）　歴史地理学実習報告第 15 集，2016，87 頁
⑩関西大学地理学・地域環境学編（野間晴雄，

松井幸一，齋藤鮎子）　高知県土佐市の地理（地理学・地域環境学教室実習報告書 40）2015 年度　2016，210 頁
⑪中村周作　原書房　酒と肴の文化地理－大分の地域食をめぐる旅－，2014, 179 頁

〔その他〕
なし

６．研究組織
(1)研究代表者
野間　晴雄（NOMA, Haruo）
関西大学・文学部・教授
研究者番号：00131607

(2)研究分担者
木庭 元晴（KOBA, Motoharu）
関西大学・文学部・教授
研究者番号： 40141949

伊東　理（ITO, Osamu）
関西大学・文学部・教授
研究者番号：70116309

松井　幸一(MATSUI, Koichi)
関西大学・文学部・准教授
研究者番号：40612437

矢嶋　巌(YAJIMA, Iwao)
神戸学院大学・人文学部・准教授
研究者番号：80513845

中村 周作(NAKAMURA, Shusaku)
宮崎大学・教育学部・教授
研究者番号：00305062

西岡 尚也(NISHIOKA, Naoya)
大阪商業大学・総合経営学部・教授
研究者番号：60336360

小口 千明（OGUCHI, Chiaki）
筑波大学・人文社会系・教授
研究者番号：20169254

中西 僚太郎(NAKANISHI, Ryotaro)
筑波大学・人文社会系・教授
研究者番号：70202215

(3) 研究協力者
水田 義一（MIZUTA, Yoshikazu）
和歌山大学・名誉教授

桑原 康宏（KUWABARA, Yasuhiro）
紀南地名と風土研究会事務局

関 信夫(SEKI, Nobuo)
千葉県立長生高校・教諭

額田 雅裕（NUKATA, Masahiro）
和歌山市立博物館・館長

石坂澄子（ISHIZAKA, Sumiko）
茨木市文化財資料館・嘱託職員

舟越 寿尚（FUNAKOSHI, Sunao）
大森海苔のふるさと館・学芸員

堀内 千加（HORIUCHI, Chika）
大阪産業大学・非常勤講師

齋藤 鮎子(SAITO, Ayuko)
関西大学・文学研究科・博士課程後期課程

武田 周一郎（TAKEDA, Shuichiro）
神奈川県立歴史博物館・学芸員

高橋　淳(TAKAHASHI, Jun)
土浦日本大学高等学校・教諭

王　君香（WANG Junxiag）
筑波大学大学院・博士課程後期課程

伊藤 大生（ITO Daiki）
筑波大学大学院・博士課程後期課程

豊田 紘子（TOYOTA Hiroko）
筑波大学大学院・博士課程後期課程